

説教 『創造し続けられている』山本 護 牧師

聖書 コヘレトの言葉 12:3~8/コリントの信徒への手紙一 12:1~26

「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である(1コリント 12:12)」。洗礼を受けたキリスト者は一つの霊を「飲み」、民族や身分を超えて一つなるキリストの体となる(12:13)。教会は一つなるものとして形成される。昨年の社会部集会でI先生が語られた、イスラームの「タウヒード」や華嚴仏教の「多即一」と同方向の思惟だ。

ただ一つなる体は「洗礼を受けた(12:13)」者に限られるらしい。イスラームでは宗教で区分されない人間すべてが、華嚴思想では草木悉皆すべての生命が、一つなる体の範囲。キリスト教はなぜこうも狭隘なのか。とはいっても、各々の教えと現実はずいぶん一致していない。イスラーム世界が調和的で、華嚴思想の源流インド=中国がエコロジーなわけではない。わが日本も万物を神の依代とする古来感覚は美しいが、利益を生まない山野には発電パネルが侵食し、都市では人間が使い捨てられる。

それでは、信仰は現実に対して無力なのか、世の波に吞まれて形骸化してしまうものなのか。現実や歴史はあまりに多層的・多義的で、単眼では判断できない。私たちは、他宗教を批判する以前に、己自身の教会を自己批判する必要がある。幸いにして私たちの「多即一」は、「皆一つの体となるために洗礼を受けた(12:13)」狭い範囲で、かつ信徒も少ないため、問題を自分事として受け止めやすい。

「体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っている(12:14)」。そうなのだ。「多即一」で一致するだけでなく、逆の「一即多」も見落とししてはならない。「もし体全体が目だったら、どこで聞か。もし全体が耳だったら、どこでにおいがかぐか(12:17)」。「すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるか(12:19)」。まさしく、これが神の創造ではないのか。私たちが金太郎飴化させる信仰は、神の創造に反している。であるにも係わらず、どこか画一的な型を強要されている。教会の空気のせいではない。自分で一定の像をつくりあげ、それに自ら入り込んでしまうのだ。

キリストの体として一致する者は、己の働きにいつそう忠実になる。働きとは、一致の港に停泊し続けることではない。港を心に据えて、波風立つ各々の場へ船出すること。教会は、そのように在る。そんな港であるがゆえに、苦しむ時に共に苦しみ、尊ばれる時に共に喜ぶ一つなる体となる(12:26)。

「目が手に向かって[お前は要らない]とは言えず、また、頭が足に向かって[お前たちは要らない]とも言えぬ。それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのだ(12:21~22)」。足より頭が高級で、鼻より目が役立つような勘違いをしやすい。世の有用性から各々の肢体を見るからだ。神の創造は私たちの生涯を通して継続される。幼児期の創造と壮年期の創造とは違う。障がいにおいても高齢においても然り。私たちは、手である時も、足である時もある。手は動かさずに口だけ出して反感を買う時もある。それでも私たちは「多くの部分があっても、一つの体なのだ(12:20)」。

私が神に創造されたという不思議。私がキリストに結ばれ、ここで皆と一つの体を形成していることの不可思議。この体において一人ひとりが永遠にむかい、キリストの御計画が徐々に啓かれていく。



【おまけのひとこと】

この足が 二つの目のように過敏だったら とても動くことなどできまい 強さだけがあつたら 身体はまたたくまに崩壊するだろう 身体は弱さに守られている 教会は悲しみに守られている